

自宅に戻ってみて青波は仰天した。

なんと、庭に大きな猪がいるではないか。しかもその猪は体毛が真っ白だった。青波が立ち竦んでいると猪はずいっと青波に近寄ってきた。

『ワシは白尾根しろおねという。今日からおぬしの所で世話になるぞ』

「え・・・？」

『我が主、千綱様から聞いておらんだか？』

「・・・あ！まさか・・・」

そういえば白蛇になった神様が、後で褒美を届けると言っていた。もしかしてこの猪が褒美だということか？こんな大きな猪一頭、うちは五人家族だが一度に食べきれないので・・・？

『娘、まさかワシを鍋にして喰おうと思ったのではあるまいな？』

「そ、そんなこと思ってません！（モロ思いましたとも！）」

凶星だったが慌てて否定した。しかし、よりによって神様のご褒美が生きた猪であるとは・・・。いったいどう扱えば良いのか正風に相談するしかないだろうが、青波は頭痛がしてきた。きっと正風はまた怒るだろう。

「でも、うちは猪は間に合っちゃるんじゃけど・・・」

『何、遠慮せんでも良い。ワシは結構役に立つぞ』

でも猪は一般家庭では飼えそうもない。だから汗を掻きながら突っ立っていると、家の中からキヤーというすごい悲鳴が聞こえた。母親の声だった。巨大猪と対峙している青波が目に入って仰天したらしい。しばらくすると祖父が木刀を片手にすっ飛んできた。

「コラ！何しよるかっ！早う逃げえ！」

祖父はすごい剣幕で青波に向かって叫んだ。猪と戦う気らしい。

「ま、待って！祖父ちゃん！これ正風んとこの猪っちゃ！散歩に来ただけっっちゃ！」

青波は慌てて祖父を止め、猪の前に出て庇った。

「だって、よう見てみいっちゃ、白いじゃろう？神様の使いっちゃ！」

確かに普通ではない、と気付いたのか祖父は構えていた木刀を下ろした。猪はじっとして暴れる様子もなかった。

「ねえ祖父ちゃん、この猪うちで飼いたいな・・・とか思っちゃるんじゃけど、だめ？」

青波は恐る恐る言ってみた。祖父は目をむいた。

「そんなん飼えるわけなからうが！早う烏帽子ヶ岳に返してこい！」

猪を返して来い、と言っているあたりで既に普通の会話でない。借りた玩具を返して来いレベルである。さすが田舎である。

「いや、でもうちん家がええって・・・」

「誰がじゃ！」

「猪が」

「ハア?!」

祖父が詰め寄る。その時、青波が手に持っていた桐箱を見つけ、祖父の顔色が変わった。

「お前、あれほど物の怪に係わるなっちゅうたのに・・・！」

まずい！と青波は河童の皿が入っていた桐箱を後ろで隠した。

『娘、このじじいやちまおうか？』

不意に白尾根が前足で地面を蹴りだした。

「だめだめ！」

『そうか？では足を開いて踏ん張れ』

「え？こう？」

素直に足を開いて振り返ると、ずどーん！と背後から白尾根が足の間首を突っ込み、青波を跳ね上げた。

「ぎゃー！」

体が宙に跳んで思わず叫ぶ。どすと落ちたのは白尾根の背の上だった。

「うひゃ！」

変な悲鳴を上げてとっさに何かを掴んだら、それは白尾根の耳だった。

『そりゃ！逃げるぞ！』

「えーっ！」

なんと白尾根は青波を背中に乗せたまま走り出した。猪突猛進という言葉どおり、ものすごいスピードだった。振り落とされないように必死でしがみつく。

『どうじゃ！驚いたか？』

「おど、おど、驚きましたー！（お願いじゃけえ街中には行かなくてー！！）」

耳の傍で風がびゅうびゅう鳴って、自分の声がちゃんと猪に届いたかもわからない。

猪はなおも得意になって走る。子供を乗せて疾走する白い猪は町民の度肝を抜いてしまった。

『あんな痩せ河童などより、ワシのほうがはるかにお前の力になれるぞ？』

白尾根は水影のことを馬鹿にしているようだった。

ふいに背後からけたたましいサイレンの音が近づいてきた。

「その猪！止まりなさい！」

「えーっ?! パトカー?」

目撃した町民の通報によるのだろう、青波はパトカーに追われる身となっていた。

「ちよっと! マズいっちゃ!」

青波は泣きそうになった。それでも町中の笑いものになってしまふ・・・帰ったら家族にもこっぴどく叱られるに決まっている。

「ねえ! ホンマにマズいっちゃ! 下手したら猟友会に鉄砲で撃たれるっちゃ!」

『ワシはそんな間抜けではないわ! 千綱様の乗り物であるワシを舐めんよ!』

白尾根はさらにスピードを上げた。青波は振り落とされないようにしがみつくのがやっとだ。

『あのような鉄の猪に負けるようなワシではないわ! しっかり掴まっておれ!』

もう背後からサイレンは聞こえてこなかった。とうとう振り切ったらしい。白尾根は沢や山の尾根を自由自在に駆け回った。崖の上からも平気で飛び降りる。まるで空を飛んでいるようだった。

『どうだ! すごいであろう! ワシはいつも千綱様をこの背にお乗せして疾駆するのだぞ!』

白尾根は誇らしげに言った。

『ワシを遣わされるとは、相当お前は千綱様に気に入られたのだな。大変な荣誉だと心得よ!』

青波は必死で頷いた。でも・・・猪に乗っている神様というのは聞いたことがない。テレビなどで象や鳥に乗った神様の像などは見たことがあるのだが・・・。

『だが人間の前には乗りにくかるう、後で千綱様に手綱を作ってもらうがよい!』

これで何の問題もない、と白尾根は笑ったが、青波はどうしようもなく不安になっていた。